ALL
本文オールフルカラー！
COLOR

ゼロいじめ。

FOR ADULTS OVER 18 ONLY

ゼロいじめ。

当サークルの同人誌をお手に取っていただきまして、
誠にありがとうございます！

皆様のおかげで、当サークル「悶亭」もなんとか
一周年を迎えることが出来ましたー（＾▽＾）/.
これからもどうぞ、よろしくお願い
いたします！なのです。

さてさて。
一周年記念に個人誌っていうのも
なんだかなぁ…、なので
ゲームの方でお世話になっている
森ぐれいさんや絵師様方を巻き込んで
突発！ゼロの使い魔本刊行です。

はい。
御覧の通りルイズに偏りまくりです。
ルイズ可愛すぎだよルイズ…。
貧乳描くの苦手なんですが、今回は頑張りましたよー。
やー、もう巨乳描きたくってしょうがないです。（オイ。）

８巻読んで凹みルイズにめっさ萌え萌えしてしまった
私はやっぱり鬼畜なのでしょうか？
でもでも、可愛い子ほど虐めたくなりますよね？…ね？

ではでは。
相変わらずの強行スケジュールにつき無事サンクリで
発行できていることを祈りつつ…（こればっか）

2006.09.25　悶亭姉太郎

前書きイラスト：たま様寄贈ｖ
ありがとうございましたー (>▽<)

■ タバサ帰郷

「どうだ、我が臣下たちよ。私の可愛い姪シャルロットの陰部の味は？！」
ガリア王ジョゼフの陽気な声が響く。

「失礼。今はタバサという偽名を使っているんだったね？」
「……」
タバサは答えない。
小さな口を中年貴族の生臭い男根に塞がれ答えられない状況ではあるが
もっとも、答える意思も無いのだという事を目を逸らし、伝える。
しかし、その無表情に見える目が薄っすらと濡れているのをみつけたの
だろう。ジョゼフの声が歓喜に踊り、一オクターブほど上がった。
「おや、私との会話どころではないようだ！
久しぶりの帰郷だ。皆が歓迎に力が入るのも許してやっておくれ！」

―…タバサの父が暗殺され、ジョゼフが戴冠して以来何度も、この王と
臣下たちには陵辱されてきた。痛みにも屈辱にも、もう慣れた。
ただ、身体をまさぐる男たちに対する吐き気を伴う嫌悪感だけは…
何度汚されようと払拭される事は無いだろう。

「！？」
不意に。タバサの膣内に鋭い異物感が走った。
「うあっ…！」
思わず声が出る。ぞるるるるっと細長い物が乱暴に突き入れられ、
タバサの小さな膣内を貫通し、子宮口を押しあげた。
「あがっ…ぅあ…っ…ふ…あ…！！」
異物の正体は杖だった。老貴族が下卑た笑いを浮かべながら、タバサの
未発達な性感帯を突付きまわしている。

「そうおびえるな、シャルロット！私が命じた行為だ。いつも宴の席で
つまらなそうにしておるお前に、快楽の味を教えてやろうと思うてな。」

快楽？何を言っているのだろう、この男は？ …こんな下種な行為に
快楽など感じようはずは無い。痛みと吐き気、それだけだった。
この異物感も気持ちよさなどとは程遠い…―

「!!?」
ビクン、とタバサの身体が跳ね上がる。
老貴族が膣内に挿入された杖で呪文を詠唱したのだ。
水魔法が中を駆け巡り、彼女の敏感な部分を探し当て、
その全てに同時に殺人的なほどの性刺激を与える。

膣内が、子宮口が、乳首が、クリトリスが、舌が。
身体の内側から摘まれ、突かれ、揉みしだかれ、こねまわされる。
「うやぁあぁああ…っ!? あんんっ…あんぅっ」
自分のものとは思えない、甘い声が漏れた。まるで発情した雌の咆哮…。

一分と待たず
困惑のなかでタバサは、生まれて初めての性的絶頂を迎えた。
思考が真っ白に焼け付く。…が、性刺激は止まらない。
さらにその絶頂のさなか、男達の肉棒が彼女の身体を再び貫いた。
アナルを、膣内を、口内を掻き回す無遠慮な肉棒から
彼女はこれまでに感じた事の無い「快楽」の波に叩き落された。

「あっ!!はぁぁああっ…！うあ！！」
ひときわ大きな声をあげた後、彼女の身体がくたり、と弛緩した。
…じょぉおおお…
気を失ったのであろう、惨めに白目をむいたタバサの
なおも犯されている白い股の下に、黄色い水溜りが出来ていく。

「おお、シャルロット何というざまだ！そのように涎をたらした淫らな顔で
紳士諸君の前で粗相をする様、天国の我が弟が見たら何と申すか…！」

真っ白に焼け切れた視界の向こう、薄れいく意識の中。
芝居がかったジョゼフの屈辱的な言葉は彼女の脳髄に染み込んでいった。

イラスト 桜井チルコ SS 監修 閑亭姉太郎

■ ゼロの淫魔

「……いくわよ……。……ふぅうっ……」

―――大きく深呼吸をして、ルイズは炎の魔法を詠唱する。

（途中まで……途中まではうまく唱えられるのよ……。
でも何で、その後が続かないんだろう？
それでいつも結局失敗しちゃうけれど、今日こそ……！！）

短い呪文だがとても長く感じた。
そして全てを声に出し終えたその時―――

「……えっ……！？」

魔法陣からぼうっ……と、紅い影のようなものが浮き出てくる。

「こ、これって成功ッ……！？うそおっ……！」

―――が。
普通の炎の魔法と、ちょっと違う気がした。

何かが……おかしい。

その紅い影はだんだんと大きくなり、形を作り出した。

「えっ……これって……し、召喚魔法ッ……！？
嘘っ……召喚魔法なんて、私―――……えっ………！？」

―――流石のルイズも「異変」に気づく。
先ほどまで紅く浮き出ていた影が、
顔を顰めずにはいられない悪臭と共に
グロテスクな魔物の姿へと徐々に形を作っていく。

「な、なにこれ……！？何なの……っ？」

ルイズは怖くなり、この場から逃げようと身を翻した。
しかし―――

「……あっ！？き、きゃああッ！！？」

しゅるん！と、魔物から伸ばされた粘膜質な糸状の触手が、
ルイズの片足を掴みあげ、離れない！
ルイズはその場にべしゃっ！と倒れこんでしまった。

「い、痛ッ……な、これ、何よっ……。……ひッ……！？」

ルイズは自分の足を掴みあげているモノを直視した。
書物でも見たことが無い、グロテスクな魔物が
口を開いた。

「契約…ヲ……」

そのおぞましい声に思わずルイズは身体を萎縮させ、
がくがくと身体を震わせる。

「契約ですって……っ！？な、何よ、こ、このバケモノっ……！？」

無意識のうちに外道の召喚魔法を唱えてしまっていたのだろうか？

「我召還ニ応ゼリ…契約ヲ……ソノ身体デ、甘露ナル対価ヲ…」

魔物はぬめぬめと黒光りする身体を擢り寄せ、その触手で
ゆっくりとルイズの身体を拘束してゆく。

「えっ！？や、やだっ……な、何するの！？　……んっ！？」

ぐぐっ……と、何臭い粘膜がルイズの口内に入り込み、その口を封じてしまう。
喉のあたりまで入り込んだソレは生温かく、ぐにゃりとした感触が吐き気を誘う。

「んぅっ！ん、んぅうう！！んぐうぅッ！！んぅう〜〜〜ッ！！」

放しなさい下郎！
わ…私を誰だと思って・・・

はいはい女王直属の女官様・・だろ？

ったくその下らない肩書きを何度聞いたことやら

くだらないですって!?

こんな状況で股を濡らせてお高くとまってやがる。

やっ

ぐじゅっ

ぬちっ

ま、薬の効果も若干あるだろうがな。

よく覚えとけ嬢ちゃん、世間にはなあのクソ王女をよく思ってねぇヤツもいるんだよ

あの女のせいで

何人もの友人が死んでいったんだわかるだろう？

!!

お前の連れもあの女のせいで死んだんだからな。

■ルイズまわし■

閼亭姉太郎

ばぁか、貴族様だぞ
御供一人死んだくらい
どうとも思う
訳ねぇだろうが！

そうでもねぇぜ
アイツがいれば俺達に
杖を取りあげられる事も
なかっただろうさ

ちっとは
惜しんでやっても
いいと思うぜ
お嬢様。

急げ！他の
乗客に見つかる
とやべぇぞ！

ああ
悪リィ

おい、とっとと
犯っちまおうぜ！

いやいや嫌アあ!!くっ

あがぁ・・ぅあぁ!!

あぐっ
よっしゃ
二本挿し成功！
うはーっ
処女マンコ最高！
くぅっ
ズヌッ







あはぁ♥
サイトぉ
大…好きなのォ
お願い
痛いの…
ガマンする…からぁ
優しくキスしてぇ
何だぁ？
現実逃避か？
お嬢様は精神力が
弱くていけねーや。
はっ
あ…んっ
はっ
ぴちゃ
ちゅぱ
王子様の夢でも
見てるんだろうよ
お幸せなこった。
はふっ
ちゃんと
大好きって
言うから…！
恥かしくても
して欲しい事全部
素直に言うからぁ
だからっ
もっと…サイトで
いっぱいにしてぇ
ずっとこのままでいて
…どこ…にも
行かないで…ぇ…
ズッ
ヌプ
ズッ
ズチュッ


気持ちいいよォ
私の中サイトでいっぱいィ
ああ
ビュルビュッ
ビュルッ
ひ…あ
ビュッ
ギュウウウ
すげぇエロ穴締りすぎ！
うおっ
ドクン
はっあ
ビクッビクッ
ドドクッ
ドクッ



Fin



イラスト：渚

HENRIETTE



SEE YOU!

発行：悶亭
発行日：2006年10月1日

お問い合わせ：mail@modaetei.sakura.ne.jp
悶亭ホームページ　（「悶亭」で検索・もしくは下記アドレス入力）
http://modaetei.sakura.ne.jp/



イラスト 悶亭妹次郎







ゼロいじめ。

悶亭 Modae Tei